

PARIS 2024



厳しい代表選考レースを勝ち抜いた永原和可那(手前)と松本麻佑のペア(昨年11月、熊本マスタース)

永原和可那

「バドミントン女子ダブルス」

十勝の精鋭パリに懸ける

パリ五輪が27日(現地時間26日)に開幕する。十勝勢では、バドミントンの永原和可那(北都銀行「青森山田高」芽室中出)が前回大会の雪辱を狙い、オープンウオータースイミング(OWS)の蝦名愛梨(自衛隊体育学校「日体大」帯大谷高出)が初出場入賞を目指す。そのほか審判として臨む2人にも注目が集まる。ラグビーの桑井勇乃さん(幕別町出身)はラグビー界では世界初、選手としても審判としても五輪のグランドに立つ。サッカーの手代木直美さん(清水町出身)は3大会連続で選出された。100年ぶりのパリの舞台にした夏の祭典。新たなドラマが間もなく始まる。(新井拓海)



互いに励まし合い五輪切符をつかんだナガマツペア(昨年11月、熊本マスタース)



激戦を経て進化 リベンジへ

女子ダブルスでは、世界上位選手らのプレの傾向が変化してきた。コートを広く使い、大きい展開を長く続けることがこれまでの主流。永原は170センチ、松本麻佑(北都銀行)が177センチと高身長ペアでの攻撃的なスタイルで、その中をいかくつてきた自身が永原にはあった。しかし今は、レシーブでも攻撃でも力強く速い展開の選手が増した。今回のレースを経て永原はそうした潮流に対し、「ここまで新しい形に挑戦し、(技術を)確立してきた。(傾向の変化は)引き出しが増えた」とプラス(にとらえること)で、私たちの新しい形として加えていきたい。

集大成として位置づけるパリに、永原和可那がすべてをぶつける。前回の東京五輪では、金メダルを期待されるも準々決勝で敗退。敗北の場面は、夢にまで出て永原を苦しめ続けたが、「悔しさを糧にやってきた3年間ですごく成長できた。パリでそれを見ることが楽しみでもある」と笑みを見せる。爽やかな笑顔とは対照的に、1年にわたるパリへの選考レースは苦しみで満ちた。中国、韓国ペアが世界ランク上位を占める中、福島由紀・廣田彩花組(岐阜Bluvic)、志田千陽・松山奈未組(再春館製薬所)らとの国内出場枠を巡る争いも過熱。最終には、廣田が負傷しながら続行するなど激化した競争をナガマツは乗り越え、シタマツに続く国内2番手でパリへの切符をつかみ取った。



2018年に芽室町民栄誉賞を受賞し、小学生時にペアを組んだ青木佑真さん(右)から花束を受け取る永原和可那



2006年の道小学生大会の5年生以下ダブルスで準優勝の(右から)永原和可那と青木佑真のペア



2013年のインターハイで団体戦と個人戦ダブルスでの2冠を果たし、芽室中時の恩師・澤田初穂監督(左)と握手を交わす青森山田高3年時の永原和可那

profile

ながはら・わか那 1996年1月芽室町生まれ。芽室小2年から芽室町バドミントン少年団で競技を始め、小学時から全国大会を経験。芽室中から進んだ青森山田高では3年時に全国高校総体の団体戦、個人戦ダブルスで優勝した。北都銀行(秋田市)に入行し、2016年に日本B代表入り、18年から日本A代表。松本麻佑とのペアで18、19年に世界選手権、19年に全日本総合選手権、21年の全英オープンを制覇。同年の東京五輪では準々決勝で敗退した。